



# 僕の彼女と先輩の関係



彼には知られたくない...

※実際にはモザイク修正です。

直也「ふあっ……」

ミコト「ふふっお疲れみたいね直也君♪」

直也「ミコトちゃん……恥ずかしい所見られちゃったな」

まだ仕事に慣れてない為が不意にあくびが出てしまった。

ミコト「がんばってね」

直也「ああ……」

実はミコトと俺は付き合っている、同期で入社した彼女は驚くべき事に幼馴染だった、思わぬ再開にお互い運命を感じたのか自然と付き合う関係になった。

とは言っても付き合い始めて2ヶ月、デートらしい事も出来ず仕事に追われる日々だった。

ミコト「終わったら……いつもの所だね……」

仕事終わりお気に入りの店で食事をする位の付き合いが続いていた、そろそろ進展も欲しい所だが……

直也「うん……分かった」



尾島「おい直也できたか？」

直也「先輩、あと少しです」

尾島「お前とるいんだから気合入れてやれよ気合」

直也「はあ……」

尾島「それより……お前ミヨトちゃんと仲良いよな？」

直也「そ……そうですね？」

尾島「付き合ってるの？」

二人の関係は会社では秘密にしてある。

社員同士の恋愛、しかも新入社員同士でとなれば

良くは思われなだらう、お互いの為にも切り分けて

付き合おうという事になっている。

直也「違いますよ……ほら、僕達同期だし何かと

話やすいとかあるんじゃないですか？」

尾島「ふうんなら良いけど」

只でさえ女性の少ない職場、ミヨトみたいに若くて綺麗な

娘は何かと目立つのだ。

日も落ち残っている社員は僕とミコト、そして先輩の尾島だけだった。

ミコト「ごめ〜んまだ終わりそうにないの……」

直也「じゃあ例のお店で待ってるよ」

ミコト「ごめんね……すぐ終わらせて行くから……」

尾島には聞こえないように小声で話す二人。

直也「お先に失礼します」

尾島「おう」



普段なら真っ先に帰っている尾島が今日に限って残っていた、そんなに仕事が遅れているのかと疑問に思いつつ直也は会社を後にする。

尾島「よし……これで二人つきりになれたぜ……」

「……は何とか距離を縮めたい所だが……」

ミコト「尾島先輩、お茶でも入れましょうか？」

尾島「いや大丈夫だよ、それより……」

ミコト「はい？」

尾島「貰い物なんだけど食べる？チヨヨ」

ミコト「わあこれってあの高いお店のじゃないですか？」

尾島「(まずはお菓子で釣る作戦……上手く行ったな)」

ミコト「じゃあ遠慮なく頂きます♪」

尾島「どうぞどうぞ……へへっ」

ミコト「ああ美味しい〜」

尾島「喜んでくれてよかったよ」

ミコト「尾島せんぱいありがと……うごじやいます」

尾島「ミコトちゃん？大丈夫」

ミコト「だいじょうぶです……」

尾島「……もしかして……お酒入りのチヨヨか？」

尾島があげたチヨヨは少量ながらお酒が入っており

どっやらミコトはそれに酔ってしまったようだ。

尾島「参ったなあ……あ、ミコトちゃん危ない！」







そんな事言っても

やばっ良い匂い・・・  
やっぱ胸でけえゴクリ  
ちよっと位・・・

だいじょうぶですよっ  
せんぱっいあははっ



手が滑った……

うおおおっミコトちゃん  
のおっぱい……これは  
やれるんじゃないか？

あははっくすぐったい  
ですよ……

ごめんね・・・  
暑くない？服  
脱いでみる？

はあはあ良いぞこの調子  
なら・・・まずは服を  
脱がしてへへへっ

あつゝいす・・・  
ふく・・・ぬぐっ

くすぐった・・・い・・・  
むにやむにや・・・



直也「ふう……。ミコト遅いな……。そう言えば先輩は

もう帰ったかな……。？」

「瞬、会社で二人つきりになったミコトと尾島の姿を

思い浮かべる。

直也「流石に何も無いだろ……。もう少し待つか……。」





ああすげっミコト  
ちゃんのおっぱい  
はあはあ唇も柔らかい

二人意外誰もいないオフィス、酔って朦朧としたミコトの服を脱がせミコトの体を食べるように弄る。



でけえなへへっ・・・  
たまんねえはあはあ  
気持ちい？ね？

碌に聞き取れていないであるコメントに強引な返事を

求めた。



ミコトを机に寝かせ自身のイチモツをミコトの秘所に押し付けた。

あん

んっ

じゃあそろそろ・・・  
本番だ、へへへっ  
こんな時が来るなんて







はあはあ綺麗だ・・・  
へへっ頂きまゝす♪  
行くよミコトちゃん





ラッキ〜ミコトちゃん  
の初ま〇こは俺の物だ



直也「流石に遅いな……。何かトラブルでもあったのか？」

「応メールだけしておくかな……」

何も知らずに待ち続ける直也は先輩の尾島に犯されている

ミコトにメールを打つ。



すげっ気持ち良いよ!  
ミコトちゃんのま〇こ  
締め付けてくるっ!

あぁ

んっ

尾島はミコトが朦朧としているのも無視して快楽に任せ腰を打ち付ける。







あっ

もっと激しくしちやうよ  
へへへっああ気持ち良い

んん

グググググ



あっ

んん

ミコトちゃんも俺の  
ち○ぽ気持ちいいかい？  
はあはあへへっ♪

ズ  
ズ  
ズ  
ズ  
ズ  
ズ



直也「メール送ったけど返事も来ない……。本当に

何かあったんじゃないや……。いや……。仕事が大変

何だろう……。でもこのまま待つててもなあ

仕方ないから今日はキャンセルって事でもう一回

メールしておくか」



ああはあはあんっ  
きもちいっ・・そろそろ  
限界かも・・はあはあ

んっ

やも

ググググ  
ストグ

無意識の中抵抗の声を漏らすミコトだったがお構いなしに  
突き続ける。



出すよっミコトちゃんの中  
に俺のをたっぷりとはあ  
はあであるっ

んっ

やあ

グググ  
グググ  
グググ

尾島は腰を深く落としミコトの奥へとイチモツを  
潜らせると身を震わせた。

尾島のイチモツはビクビク震えミコトの奥へと注ぎ続けた。



はあはあすげっでてるっ  
ミコトちゃんのみここが  
気持ちよかったせいだな

はっ

あぁ

ビクビク  
ビクビク  
ビクビク  
ビクビク

ミコト「ふあっ……あれ私、いつの間に……」  
目を覚ましたミコトはすぐに異変に気づいた。

ミコト「な……なんで私、裸……えっ??」

裸の自分に驚くのは当然だが更にその横に裸の尾島が眠っていたのだ。

ミコト「嘘っ……私……えっ??」

困惑し動揺が隠せなかった、そんなミコトにメールが届く、直也からだ。

ミコト「直也君……今日は……キャンセルって……」

時計に目をやるとずいぶん時間が経っている事に気がついた。

ミコト「そんなんっ……私……先輩と……??」

微かに残る覆い被さる男の影、ミコトは急いで身なりを整え会社から逃げるように出る。

ミコト「嘘だっ……でももし本当に先輩としたなんて

私初めて……うう……悪い夢でも見たんだ」

現実を認めたくない一心で足早に帰宅した。



次の日

ミコトは落ち着かない様子で仕事をしていた。

昨日の事を考えれば当然だろう、いつそ休みたいとすら思ったが間違いであつて欲しいと希望を捨てれずに居た。

直也「昨日はどうしたんだ？返事も返つて来ないし……」

ミコト「えっ……その……うん、ごめんね……」

仕事が遅くなつちやつて……」

昨日の事が事実なら一番知られたくない人が話しかけて来たのだ、動揺し曖昧な返事を返す。

直也「そっか……まあ無理はするなよ、予定なんて

幾らでも変更できるんだから……」

ミコト「うん……ありがとう……」

ミコトは直也に返事を返しつつも視線はある男を

探していた。

尾島「どうしたのミコトちゃん？俺の事探してた？」

ミコト「えっ……違います……」

尾島「ふうくん……じゃ……」

尾島はそれだけ言って去って行った。

ミコト「(あれ……それだけ?)」

もし昨日の事が事実なら何かしら言ってくるなり態度に出るなりすると思っただけに拍子抜けだった。

ミコト「(もしかして昨日の事は……本当に悪い夢でも

見てたのかも……それだったら私……)」

確信を得ない希望を抱きつつあったミコトだったが……

ミコト「あ、じゃあこれ置いて来ますね」

仕事の資料を別室に持って行く最中、希望はあっさりと打ち碎かれるのであった。

尾島「ミコトちゃん！」

ミコト「ひっ！・・・あっ尾島先輩・・・何か？」

尾島「へへっ何か？ってそっけないなあ、昨日はあんなに愛し合ったじゃないかあ」

ミコト「きの・・・う・・・そんなっ・・・夢じゃ」

尾島「何言ってるんだい、ミコトちゃんの初ま〇こ気持ち良かったなあへっ」

ミコト「いやっ・・・やめてっ！」

尾島「やめてっかあ可愛いなあ、ていうかさ俺達

ちゃんと付き合おうぜ、一晩で終わらせるのはもったいねえへっ」

ミコト「嫌ですっ・・・」

尾島「へえ断るんだあじゃあみんなにミコトちゃんと寝たっつて言いふらしても良いの？」

ミコト「・・・卑怯者・・・」

尾島「へへっ何とでも言いなよ」



尾島「はあ・・・まあ良いや・・・じゃあさ啜えてよ？」

ミコト「くわっ・・・えっ・・・？」

尾島「付き合いわなくて良いから俺を気持ちよくしてくれって言うてんの」

ミコト「酷いっ・・・」

尾島「断るなら・・・」

ミコト「(もしばらされたら直也君にも知られてしまう)」

尾島「どうする？」

ミコト「分かった・・・分かったわよ・・・」

尾島「へへっじゃあこっちでさ・・・」

尾島は人通りの少ない薄暗い通路に誘い込むとズボンを下ろしイチモツを見せ付けた。

尾島「ほらっ早くしろって・・・」

ミコト「うう・・・」

尾島「こうするんだよ！」







おほおっミコトちゃんの  
口ま〇こ暖かくて良いよお  
気持ち良い〜

んぐっ!!



へへっ抵抗しても駄目だよ  
ほら動かすぞっしっかり  
味わってくれ♪

うん  
ぐん  
ぐん



はあはあやべっ……  
口も良いけど下の口も  
楽しみたいな♪

ん！  
ん！



直也「あれ・・・？そういえばミヨトが居ないな・・・  
さっき資料がどつとが言ってたけど・・・それに  
先輩も・・・先輩はサボリだな・・・」  
二人が居ない事に多少の違和感を感じつつもさほど  
気に留めなかった直也だったが・・・



うっやあ  
だっだあ!

へっっ気持ち良いよお  
ミコトちゃんの中は♪  
何回突いても吸い付く

あっ

グッッッ



ミコトちゃんも気持ち良い  
でしょ？俺のち○ぽを  
こんなに締め付けて

ちがっあ  
いやああ

あ

グズグズ  
グズグズ



やだやだ  
ああああ

おっおお締まるゝそろそろ  
出すよへへっ良いだろ？  
もう一回出してゐるんだし

グググ  
グググ

あっ



やあ!  
うう... やあ!

あ... 暴れるから逆に  
刺激が... ううでるっ  
はあはあへへへっ

ん

トコトコッ  
ルルッ

尾島「ああすつきりした♪気持ち良かったよミコトちゃん  
まあまた頼むよ、俺が飽きるまでなへへっ」

ミコト「うう・・・うっ・・・ひつく・・・なんで・・・  
こんな事に・・・」

尾島「へへっ泣くほど気持ち良かったか？これから  
たっぷりそのエロい体で楽しんでやるよ♪」

ミコト「さいてい・・・」

尾島「なんとでも・・・おっとそろそろ帰らないと  
怪しまれるぞ・・・」

ミコトは零れる涙を必死で拭い身なりを整える為トイレに  
駆け込んだ。

尾島「可愛いねえ・・・こんなチャンスねえからな  
ガバガバになるまで使ってやる・・・へへっ」



直也「あれ？ミコト遅かったな……？」  
ミコト「えっ……うんちよつと……」  
視線を反らしながら小声で応えるミコト。

直也「……どうしたのかな、様子が変だ……」

尾島「おう直也、頑張ってるか？」

直也「先輩？はい……？」

尾島「そうか頑張れよう」

ミコトとは対象的に上機嫌の尾島に違和感を感じる。

尾島はその日以来、頻繁にミコトの体を求めてくるようになった、場所や時間も関係なしにやりたい時にやる。

ある日はトイレの中で……



直也「ふあつ疲れた……」

休憩中、直也はトイレに用を足しに来ていた。

あつ……んつつ……だめつ……

直也「んっ?」

直也意外誰も居ない筈のトイレで微かに聞こえてくる甘い声に気がつく。

直也「誰か居るのか……女……?まさか……」

んっああつ……やあつ……あつあつ……

直也「(間違いない誰かやってるなっ!?!会社でよく

やるなあ……誰と誰だろ……)」

女性の少ない会社なだけに妄想が膨らむ。

直也「(気になるけど……気づかなかった事にするか)」

直也は誰とも知れない二人の関係を邪魔するのも野暮だと  
気を利かしたつもりだったが……





構うもんかへっ良いぜ  
締まる締まる緊張感でまた  
興奮するんだよなあ

誰かに気づかれる  
から・・・やめっ

グッ  
グッ  
グッ

へへっ気持ち良くなって  
来たか？うん？甘い声が  
漏れてるぞ♪

あぁ♡

あぁ♡  
ひっあ♡

アッアッ  
アッアッ



否定しようとも突かれる度に声が漏れる。

ほれほれっへへっミコト  
ちゃんのお〇んこは正直  
だなあはあはあ

やあ♡

ちがっ♡  
あ♡あ♡

アッ♡  
アッ♡



直也「あれ？そういえばまたミコトが居ない……  
……いやいやまさか……ね……」

疑念を抱えつつある直也を他所にミコトは毎日のように  
尾島に犯され続けた、直也だけには知られたくない  
ミコトは直也への後ろめたさもあつて話す機会も減って  
行った。

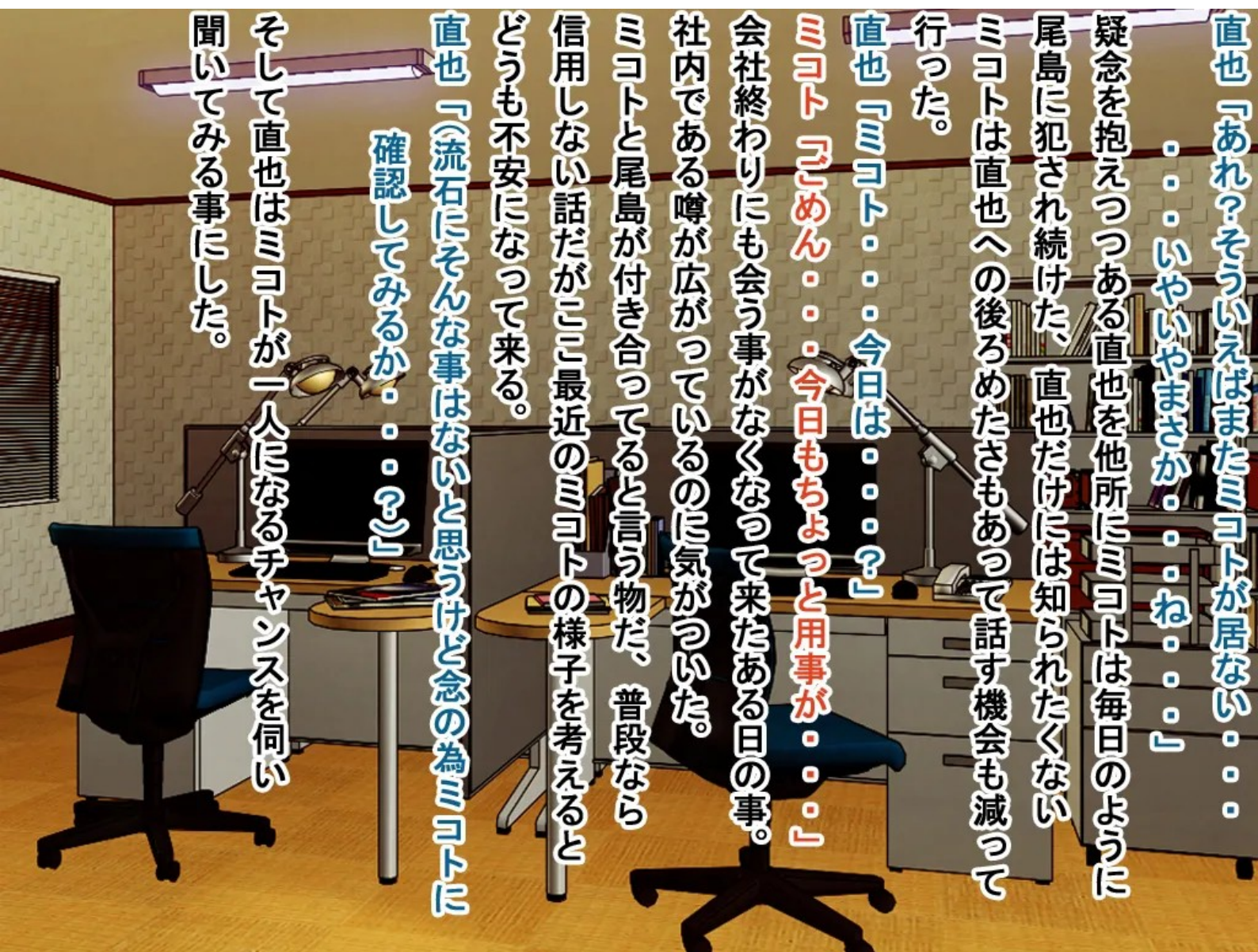
直也「ミコト……今日は……？」

ミコト「「めん……今日もちよつと用事が……」  
会社終わりにも会う事がなくなつて来たある日の事。  
社内である噂が広がっているのに気がついた。

ミコトと尾島が付き合つてると言う物だ、普段なら  
信用しない話だがここ最近のミコトの様子を考えると  
どうも不安になつて来る。

直也「（流石にそんな事はないと思うけど念の為ミコトに  
確認してみるか……？）」

そして直也はミコトが一人になるチャンスを伺い  
聞いてみる事にした。



直也「ミコト!」

ミコト「きゃっ……直也君……!?!」

直也「ちよつと聞きたい事があるんだけど……」

ミコト「……!?!?今は……ごめん……」

直也「ミコトっ!……今日……いつもの店で待ってる

遅くなっても良いから……来てくれ……」

ミコト「……うん……」

ミコトはそれだけ答えると足早にその場から去った。

直也「やっぱり何か変だ……店には来てくれるって

約束しだし……もう一回ちゃんと聞かないと」

尾島「おう……何してんだこんな所で?」

直也「尾島先輩……(この人にも聞いてみるか?)」

尾島「なんだあ?俺の顔に何かついてるか?」

直也「尾島先輩……噂……ミコトちゃんとの……」

尾島「おっ何だ?お前も知ってたか?」

直也「・・・噂ですよね？」

尾島「本当だぜ？俺はミコトちゃんと付き合ってるだ♪」

直也「へっへえ・・・(まてまて・・・落ち着け・・・)」

尾島「ここだけの話だけどよミコトちゃんおっぱい

でけえしあそこの締まりもすげえ良くてなへへ」

直也「はあ・・・(ういっ・・・)」

尾島の話は信用できないと思いつつもどこかで本当  
だったらと思う自分が居る。

尾島「ミコトちゃん処女だったけど俺がすっかり仕込んで

やったおかげで俺のち○ぽ大好きになったみたい

今日も仕事終わったらホテル直行よ♪」

直也「そうですか・・・」

嘘だ嘘だと頭の中で繰り返す、それに今日は俺との約束が  
あるんだと怒りや不安の入り混じったまま仕事に戻った。

仕事も終わりのいつもの場所に来ていた。

直也「ふう。。。きつと嘘だ、あの先輩だから適当な

密林書「事言ってるからかかってるに違いない」

ミヨトを待ちながら独り言を呟く。

しばらく経って時計を確認する。

直也「。。。まだかな？。。。」

その頃ミヨトは。。。

三井住共銀行







今日はたっぷり可愛がって  
やるからなへっ・・・  
おらっおらっ！

あっ♡

あっ♡

Aiiii

ズンズン



ああ気持ち良い〜本当  
何度やっても良いぜ  
はあはあへへっおらあつ

あハハハ

心

アハハハ

ズンズン

直也「遅い。。。嘘だと信じたいけど。。。電話して  
みるか。。。」

しばらく待っていると繋がった。

直也「あっもしもしミコト。。。？おい。。。？」

繋がったが出ない、反応がないので不思議に思っていると

「あっあああっ尾島先輩のおち○ぼしゅこいつっ奥を  
突いてくるのおっああっうっくううあああっ」

直也「なっ。。。」





あゝ♡

んっ♡

欲しいですっ私の  
お〇んこにください  
いっぱいっあぁっ

へへっずいぶん素直に  
なったもんだ、そんな  
俺のち〇ぽが欲しいか？

グググ  
ハハハ

モニターは電話に出たのではなく偶然通話状態になって  
しまったのだ。



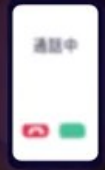
尾島先輩のいっぱい  
中に出してって  
はあはああああ

んっ

あっ

グググ  
グググ

今日もたっぷり中に  
出してやるからな♪  
しっかり味わえよ！

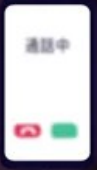




あぁっすごっついっ  
出てる私の中に...  
ビクビクッって♪

んっ♡

あっ♡



ううっでるでるっ♪  
ミコトちゃんのお〇んこ  
最高だぜへへっ

んっ♡  
んっ♡  
んっ♡  
んっ♡  
んっ♡

「あっんっまだ出てる……先輩の濃いの……」

直也「……」

決定的だった、声の主は間違いなくミコトそして尾島の物だった。

直也「そんな……ミコト……なんで……」

ミコトは直也に知られたくない為、我慢し続けた結果

ミコトは快楽に溺れて居たのだ。

直也は何故そうなったのかも見当もつかず突然

突き付けられた尾島で感じるミコトの声。

直也「はははっ……悪い夢でも見てるのかな……？」

はははっ……帰ろう……」

もうここに居る意味を失った直也はミコトに別れの

メールを送信しつつ去った。

ミコトがそれを見るのは尾島の腕の中で起きた時

何もかもが手遅れである事を知るのだった。

三井住共銀行

おわり













































